



日本キリスト教会信徒大会

ニュースレター NO.4 www.nikki.asia 又は 日本キリスト教会 HP から 2015年5月3日
信徒大会実行委員会発行 発行責任者 実行委員長 田部 郁彦

1. 信徒大会に期待する思い

「半世紀ぶりの信徒大会」

南 純(引退教師・千葉県在住)



信徒大会が51年ぶりに開かれる。まさに画期的な企画である。51年前に参加した一人として、当時の熱気がよみがえってくる。歴史編纂委員会の手でその折の総合討議がCD化されているが、それを聞くと、当時の生々しいやり取りにも接することができる。

ところで、日本キリスト教会の創立当初には大会規模の修養会が毎年のように実施されている。創立大会や第一回大会に先立って、まず日本キリスト教会の回顧と展望がなされているし、九州中会の建設が扱われた臨時大会(1953年、御殿場)をはさんだ3日間にわたる修養会では「日本基督教会の信仰確立」が論じられている。その後、毎年のように大会前には修養会が開かれ、

「時代と宣教」、「日本基督教会の前進」、「今日のわが教会の課題」、「日本の救い」(88記念)などの主題がなされている。やがて、大会前の時期は全連婦修養会にゆずられたが、このような流れが1964年の信徒大会「前進する日本基督教会一祈り、仕え、献げよ」に結集していったように思われる。

さて、私にはもう一つ信徒大会にまつわる個人的な思い出がある。1964年4月に神学校に入学したが、4月末に開かれた信徒大会後に突然一人のクラスメイトが出現したことである。現大分中央教会牧師南茂昭夫兄で、彼は5月に入って決意も新たに入学してきたのである。今なら1年待機も余儀なしかも知れないが、当時はその献身の決意を喜び迎える機運が盛り上がり、それは大会の主題にもマッチしていた。

今回の「宣教の新たな展開を祈り求めて」という主題は、全教会と教会員に対するチャレンジであろうが、これを通して再び献身者が起こされることを祈ってやまない。

「その場に居たという恵み」

八田牧人(札幌発寒教会牧師)



1964年4月29日、当時中学3年生のわたしは、高校受験の年なのに転校したこともあり、何事にも焦りと怒りを感じていた。そんな状況で参加したのが大阪女学院で開かれた全国信徒大会であった。

ホール・チャペルでの開会礼拝は藤田治芽、林三喜雄、斎藤義治をはじめ諸先生方が並び、チャペル一杯に会衆がぎっしりと詰まって見えた。プール越しに撮った参加者全体の記念写真をはじめ、昼食や分団協議も、他人の思いに関心を持つ余裕などない中学生にとっても心に残る光景であった。

今回、50年ぶりに全国信徒大会が開催される。前回の思い出話ではなく、そこに居たという恵みについて述べたいと思う。何故なら、こういう大会規模の集会開催には必ず賛否両論があるからである。

まさか教会の中でまで今流行の対価効果が問題にされている訳ではないと思う。しかし、信仰者の歩みにとって、何が恵みであるかを予測していてもあまり意味がない。

全国的な教会の集会に参加したことの意味は、長い時間を掛けて姿をなしてくるものである。当時のひねくれ中学生だって、その後間もなく信仰告白し、教会生活を送る中で、神学校を経て教師となっていった。必ずしも参加して感動したからではない。参加したことで、50年の間、自分も参加した集会に対する他者からの批判や好評価を聞かされながら、なお自分なりに意味を探り続けられたことが大きいと言いたいのである。

信仰の歩み・教会生活には中心となる「立ち帰り」の場があると同時に、全教會的な共通の体験による世代を超えた建設的な話し合いの「核」も必要だろう。参加しない予測批評より、信仰の交わりを醸成する楽しみに加わることの方が間違いなく「養い」になる。

「信徒大会に、みんな集まろう」

田上 中(栃木教会長老)



私は若い日、受洗後2年目にプロテスタント創立88年全国大修養会が東山荘であった時にも、その後大阪女学院での全国信徒大会にも参加した。私が33歳の時である。それから50年、主に導かれて歩んできた恵みを顧みて思う。

あの大修養会、信徒大会において、老年の大先輩の、教会に仕える熱意と志を確かに受けてきたこと。そして教会の歴史を築いて世を去った先人に力を与えられて、その歴史を私たちが歩んできていることを。

今回、この信徒大会の開催について知った時、自分のような老年が参加するよりも、教会の青年層・青年層が大勢参加すべきではないかと考えていた。

しかし、改めて思う。この信徒大会に参加すべきは、子どもも、青年・青年層も、そして老年も、みんな参加すべきではないかと。

使徒言行録の2章に聖霊降臨日の出来ごとが記されている。「一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ〜」とあり、一人一人が聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、新しく宣教の行動が開始されたこと。また、その後のペテロの説教には、ヨエルの預言が引用され、「終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。」と、すべての人が霊の力をうけて働くことが証言されている。

この50年目の信徒大会に、子どもから老年まで、みんな集まって、主を仰ぎ、共に聞き、祈り、幻を見、夢を見、前進しよう。

2. 「青年の集い」へのご案内

「青年諸君！」

青木 豊(高知旭教会牧師)



4月20日(月)の夜と21日(火)に20歳前後の青年たちと比較的若手(?)の牧師たちが集まり、最初の準備会をしました。その席で、中年になった牧師の言葉が胸に刺さりました。「僕が若い頃は、真剣に学ぶことと同年代の者が集まり楽しむことが一体となって教会が楽しかった。しかし今は……」。だからこそ、とにかく集まろうではありませんか！

先ず21日(月)は「歓迎夕食会」。コンセプトはアイスブレイクナイト。緊張を解いて(アイスブレイク)自由に話せるように、近畿中会の青年たちがアイデアを練っています。

その空気のまま、新しく来る仲間も加えて22日(火)午前の「青年の集い」に突入。コンセプトは、私たちは今ここから出発する—SEIKAIの始まり。キリスト者の青年として「この世で、教会で、自分が今していることや心にある思い」そして「これからしたいこと、妨げになっているもの」など、今まで黙っていたことも、先ず口に出してみます。ここでは、牧師たちは教えません(必ずしもSEIKAIを知っている訳でもない)。むしろ、話しのきっかけになることを青年の代表に話してもらったり、様子によっては小さなグループに分けたり、みんなが話せるように手助けをします。

その他に、22日(火)夕食後の「テーマ別懇談会」に東京中会青年部が何やら企画を準備しているようです。

とにかく集まりましょう。「今ここから出発する」ために！

3. 実務委員会から

先に一般用、並びに青年用参加申込表を送りましたが、ここにあらためて参加申込表を送ります。この度の新しい申込表に記入して返送していただければ幸いです。

※一般用参加申込書：参加者の年齢は「子ども」の参加者のみについて記してください。

※青年用参加申込書：関係者のご厚意で、部屋数に限りはありますが、あらたに最寄りのホテルに9月20日(日)、21日(月)、22日(火)と宿泊する部屋を確保しました。(最寄りのホテルの宿泊料金は会場併設ホテル以下の見込み。なお、部屋数を調整する都合により、最寄りのホテルになるか、会場併設ホテルになるかは、こちらに一任願えれば幸いです。)